



発行：救いの光教団
編集：神成編集室
東京都世田谷区北沢
(☎155-0031) 2-22-10
電話 代表 03(3413)0123
http://sukui.jp
毎月1回1日発行
購読料 1部80円
(会員の購読料は会費に含む)

2026
No.642
2月号

—みろく大神—

幾 万 年 待たれ給いし大神の

仕組は今し成らんとすなり

地上天国 打樹てんとて大いなる

力揮わす五六七大神

無限絶対の 力の原は主の神の

尊き御魂にありとこそ知れ

(祈りの玉ぐさ十九頁)

御光筆『靈書 大光明如来』



引首印 明光
落款 自観
落款印 森羅萬象
昭和十年

◎教団方針
信徒よ速やかに目覚めよ、
それは光を受け、邪を捨て、光を授け、
正に生きる事である

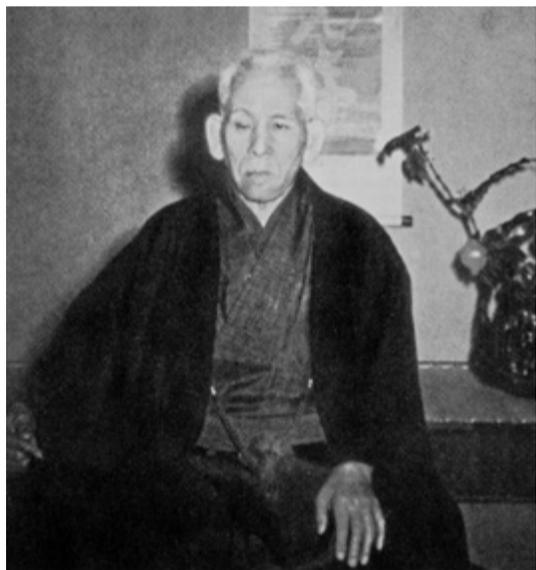
神言靈

大光明世界を造る(抜粋)

大光明世界というのは、読んで字のごとく観音の光によつて、闇のない世界が出来るのであります。そういう世界が果たして、出来るかどうか疑わしいというのが、今日までの状態でありました。ところがそういう世界は確かに出来るんであります。

今や大急転回をもつて出来んとしつつあるんであります。それで私は、ちょうど今から七年前に観音、すなわち伊都能売之大神様から知らされたんであります。その時にはまだ本当に出来るかどうか、正直を申しますと多少は迷いが

ないでもなかつたんであります。ところがその頃から今日まで数限りない奇蹟を見せられました。到底人智や経験では



京都平安郷春秋庵にて 昭和29年(1954)6月

は量れない、説明出来ない、驚くべきものなのであります。その奇蹟たるやことごとく大光

◎方針のみちしるべ
(一) みつめなおそう明主様の心
(二) つらぬきとおそう明主様の心
(三) 教団綱領を尊び実践する
(四) 信仰継承は家族と家庭円満から

明世界の出来るという事を裏書きし「絶対に間違いない」と言う事を示されたので、ますます信念が強くなり、もう自分によつてそういう世界が出来る、実は観音様が私の体を機関として、そういう世界を造られることが一点の間違いないという事が分かってきたのであります。

それで今度、私がやらされる事、創られるそれが、それなんだという事のはつきり判つたのであります。それから、その根本は何であるかという、それは「観音の力」であります。この力、観音力というものは、今まで、本当に世の中に現れた事がなかつたのです。

いよいよ天の時が来て、絶対の力が今度、これから地上に現れるのであります。何千年の間、人類が知らなかつた力が出るのでありますから、いろいろと想像もつかない事が今後は出てくるであります。

世界が天国になる事は、まず世界を構成している単位を考えれば判るのであります。それは結局人間であります。世界は人間の集合体で国が出来、国は市町村から成り、市町村は家から成り、家は個人から成っています。ですから単位たる個人が救われねば世界は救われるはずはないのであります。まず個人が救われ完成しなければならぬのであります。一軒の家が世界の型とすれば、一家が天国になつて救われて世界は救われるわけでありまして。

大光明世界の建設は難しいように思うが、そう難しくないのであります。つまり病貧争の無い家庭が世界中に満ちればよいのであります。それでここに世界は初めて真の平和に浴する事が出来るのであります。

(昭和十年一月一日)

「おことば」 【令和七年十月十二日 全国信徒代表会終了後、本部御神前にて】

令和七年十月十二日、全国信徒代表会終了に合せて光守様のお出ましを賜りました。

本部御神前にて一同で終了参拝の後、全員で写真撮影を終え解散して間もなく、光守様が「少しよろしいですか？」と仰せられ、「おことば」を賜りました。

この度、令和八年新年号にて賜りました二首の神歌はこの「おことば」における神歌であり、教団方針に基づく明主様信仰の在り方を改めてご教示くださったものと拝察いたし掲載をさせていただきました。

突然の出来事でもあり、しっかりと聞き取れなかったところもあり、つじつまがあわないところもございますが、まとめさせていただきます。

下記はその「おことば」の内容です。



「おことば」を述べられる光守様

皆さん、少しよろしいですか？

皆さん、少しよろしいですか？ 教会長が明主様の代わりとなって『結(むすび?)』であるところをハッキリとお伝えして欲しいと想います。本来であれば明主様の御声を録音してその事をするはずでしたが、そこまでいきませんでした。

そこで、「教会長には明主様の御声を代読して欲しい」ということが、私が申し上げた事でありました。 教え(祈りの玉ぐさ)の二十二ページを開いて下さい。

『人々よ 吾を信ぜよ信ずれば 無限の幸を豊かに恵まむ』
『或時は 熱湯に入り或時は 薄氷踏みし過去の吾かな』
『眼にみえぬ 神の縁の糸強く』

ひかれて真道を我は来にけり』 この三句を明主様は教会長を見極めた上で代読を託されていると想いますので、『人々よ 我を信ぜよ』と二回、心静かに浄めて代読して下さい。

(祈りの玉ぐさ) 十八ページです。 『火水土 三位一体の御力を 具へて出でます五六七大神』

を皆さんの集まる教会・光導所・集会では二度三度、教会長がゆっくりと心浄めて頂いて拝読して下さい。五六七大神、みろくおおかみ、とお唱えしていましたが、みろくおおかみ、として下さい。 こんな事はないのですね、今迄に。それ

がどういうことか？ 今月は二回あるんです。

『三位一体の御力を 具えて出でます 五六七大神』 これは大変なことです。 明主様がこの文章(御詠)をおつくりあそばされたのは、皆様と同じ視線まで、例えば明主様が三階から一階まで階段を降りてきて下さり拝読して下さいました。これは教会長が先達をし、その後を信徒さんが申し上げるといふ順序です。わかりましたか？ (強い口調で)

『具へて出でます五六七大神』 このところをしっかりと抜かさぬように練習をして、先達をするその日に具えて頂きたく想います。

普通でしたら明主様が御在世であれば、きつとですよ『このように言して下さい』と仰つて下さるのですが、いらつしやりませんので明主様の御心を肝に銘じ、喉の調子を整えしっかりと準備して下さい。

この日に(?) 明主様が仰つて下さいと私は思っていたのですが、全無かつたものから、明主様の御気持ちを感じまして、こちらではこのようにさせて頂きたいと想います。

「おことば」 お取次ぎのあり方

私たちが光守様の御心を汲んで、「おことば」をお取次ぎさせて頂いた際の際のあり方は次のようにさせて頂きます。 ◎ 祈りの玉ぐさ二十二ページ

『人々よ 吾を信ぜよ信ずれば 無限の幸を豊かに恵まむ』

『或時は 熱湯に入り或時は 薄氷踏みし過去の吾かな』
『眼にみえぬ 神の縁の糸強く』
ひかれて真道を我は来にけり』

『人々よ 吾を信ぜよ信ずれば 無限の幸を豊かに恵まむ』を、心を浄めて、二回拝読させて頂きます。 ◎ 祈りの玉ぐさ十八ページ

『火水土 三位一体の御力を 具へて出でます五六七大神』を、まず、教会長(または準ずる方)が静かに三回拝読させて頂きます。

次に、教会長(または準ずる方)が、二回拝読し信徒がその後二回拝読させて頂きます。特に、『五六七大神』は、みろくおおかみ、と拝読させて頂きます。 ◎ 明主様がこの御詠(祈りの玉ぐさ二十二ページ、十八ページ)に込めた御心は、主神が大宇宙を創造され、全ては主神が支配されておられること。

・主神が明主様の腹中に天降られ神人合一になられたこと。

・明主様を信じる事で無限の神の御守護を賜り幸福に導かれること。 以上の事柄を踏まえて「おことば」を学ばせて頂き、信仰の向上に努めさせて頂きたいと存じます。

『靈書 大光明如来』 (神成第一面の御光筆) について

明主様は、特に礼拝の対象である御神体の御書筆について『書は霊であり剛であるから霊を重んじ霊力の發揮を主とし、筆勢を尊ぶのである。』と仰せられ、御自身の御書に対して御自ら敬意を払われました。

この御光筆は、御神体の第一号ともいえる書で昭和十年亥の歳、大日本観音会発会の年に御書きなされたものです。

日々信頼厚く理事という立場で、お側で御用をされた、岡庭真次郎先生(※)が、御神体としての御書を『まずあなたに一番先に上げよう。いずれこの先御神体になるからね。』と特別に御下賜にあずかり、ただただ平伏し、いまだ経験したことのない明主様の何気ないお姿の中に秘められた崇高な霊気を直観し一切を明主様に捧げようと、魂の覚醒、新生ともいべき神秘的な体験をしたといわれています。

※岡庭真次郎先生は、救いの光 教団で教師をされていた故 岡庭弘美先生のお父様になります。

御聖誕祭会長挨拶 (要旨)

本日は、明主様御聖誕百四十二年祭、大感謝、十二月感謝祭、誠に改めてとうございます。本来、明主様の御聖誕は十二月二十三日ではありますが、二日早めての日曜日に多くの方とお祝いと感謝の大御祭典をさせていただきたく、本日のお許しを賜りました。また、二ヶ月毎にめぐってまいります甲子の日を迎え、今年納めのみろく大黒天神様の甲子祭をあわせて執り行わせて頂きました事、大変有難く感じております。

皆さんは今年一年をふりかえり、日々の生活、生業はいかがでしたでしょうか。様々な場面で、喜びや哀しみ、怒り、楽しかったこと、嬉しかったこと、苦しかったこと、つらかったことなどがあつたかと思えます。そして、それにとまなう心の持ち方、言葉遣い、または行いはどうであつたでしょうか。今日はその全てを省みて、大光明・明主様へのお詫びと感謝をお捧げする大感謝の日でもございます。身の回りに起こるすべての苦しみは浄化であり、よくなるためのお掃除です。そのお掃除がすんで、はじめて大光明・明主様より御守護のご褒美が頂く事が出来て、その繰り返しで、ご自身の霊的な曇りが取り除かれて向上が許され、体的には恵まれた境遇となり、幸福になれるわけでございます。日々の生活の中で思うようにいかないというのは何か自分に曇りがある、または試されているということでもあると思うのです。そのハードル、壁をこ

えることができたら、一つ上のステップに進ませていただけるようになります。その積み重ねによって信仰の向上、厚みというものが出てくるのではないかと思います。その時に経験したことが智慧となり、栄養となって相手を思いやる心や言葉遣い、行いができる人となり、教団綱領で掲げております、「誠と愛の人」になれるのではないかと思います。神様はその人にとって、越えられないハードルや壁はつくらないはずで、その無理難題に直面したときにやる気を失うことが一番こわいことで、それはせつかく神様から与えられているものなのに、そこから離れてしまえば、神様からも離れてしまいます。常識的、また普通に考えると不可能だと思えても、精一杯とことんまでやらせて頂くこと。どんな御用でもしつかりやりぬくこと。はじめから投げだしてしまうことは人間が神様を常識の計りにかけていることとなり、恐れ多いことで、そういう心だから神様がお見放しになられるわけです。人間は現世のみならず、霊界へ行き、再び現世へ生まれてくるのも神様の御命令によるものです。人間が「そんなことできるわけない」という弱音を吐いたり、物事を投げってしまったら、その人のプラスになるでしょうか。誠心誠意、尽くし、尽くしても、尽くし足りないのが明主様に対しての御恩です。つまり報恩です。このことは、明主様が昭和二十六年から二十九年まで

四回にわたり関西御巡教をされた際に、ご準備からご滞在中の対応までを仰せつかり、明主様の身近で御奉仕された、とある関西の教会長先生のお話の一端ですが、恥ずかしながら私自身も思うところがあり、痛感し、明主様に申し訳ない気持ちでいっぱいでお詫びと反省をさせていただきました。明主様のお側での御用というものは非常に気が抜けません。まさに真剣勝負であり、明主様は人間の御姿をされてはおりますが、最高神のお側におるわけですから、本当の誠がないと、すぐにお叱りをうけたりすることになります。ですから本場の誠が試されたわけです。もし、明主様のご存命でおられたら私達にどんなお言葉を発せられるでしょうか。やはり、お叱りでしょうか。それともお褒めのお言葉でしょうか。はたまた、

『信徒よ すみやかに 目覚めよ
それは 光を受け 邪を捨て
光を授け 正に生きる事』

と仰せになられるでしょうか。本日の神歌に、

『世の人よ 今 我が揮う力より
上の力はなしとこそ知れ』

と賜りました。これは明主様の御力というものは最高神の神様の御力であることを全ての世の中の人に知らしめるということ。もう一つは、

『やがて来む 審判(さばき)の峠 安らけく 越す人となれ身魂磨きて』

霊界の夜昼転換が始まり、現界にも表れつつある昨今は審判の大峠でもあります。これを越えさせていただく身魂、資格をもつ人になりなさい。ということ。明主様は人類の「救世主・救い主」であり、人類にとつての昼の世界の中心となる太陽であり、「真の文明の創造者」であります。そして、明主様の御光はすべての人が求めているものであり、主神の光です。その光のすばらしさを伝えるのが私達救いの光教団信徒の役割でもあります。その素晴らしき光を待っているのは、霊界の祖霊様であり、現世に生きる人々です。その光はすべての人に注がれています。だから気が付いていないだけ。だから気づかせてあげるといふことです。

この明主様の御光を広げるところは、救いの光教団のみならず、国内外にある大小様々な明主様信仰の教団、またはグループです。そして救いの光教団もその仲間の一員です。現在、国内においては、当教団を含めた、十二団体で「大和心の会」という会が結成されており、過去の一元化などにより、離ればなれになったところが、再び集まり、お互いの団体が、今まで培ってきた明主様信仰の考え、ありかたを尊重しつつ、力を合わせて、明主様に帰一していこうという目的のもとに活動が始まっております。これは、霊界ではすでにこの事象が現れて、現世に現れているのではないかと思います。

霊界に往かれた先達の先生方、信徒の皆さんがお働きをされておられるのではないのでしょうか。今の目に見える教団の姿とは違って霊界では様々な動きがあるのかもしれない。やがてはまたその姿を私達も目にすることになるでしょうが、神様から見放されることのないように、希望をもって、あきらめることなく新しい年につなげてまいりましょう。

本日の大御祭典を、本部はじめ各布教拠点、またそれぞれの場所におきまして御参拝された方々とともに心を合わせて執り行わせて頂きました事、大光明・明主様、幽世大神様、みろく大神天神様に感謝を申し上げ、光守様に思いをよせつつ、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

本日の大御祭典を、本部はじめ各布教拠点、またそれぞれの場所におきまして御参拝された方々とともに心を合わせて執り行わせて頂きました事、大光明・明主様、幽世大神様、みろく大神天神様に感謝を申し上げ、光守様に思いをよせつつ、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

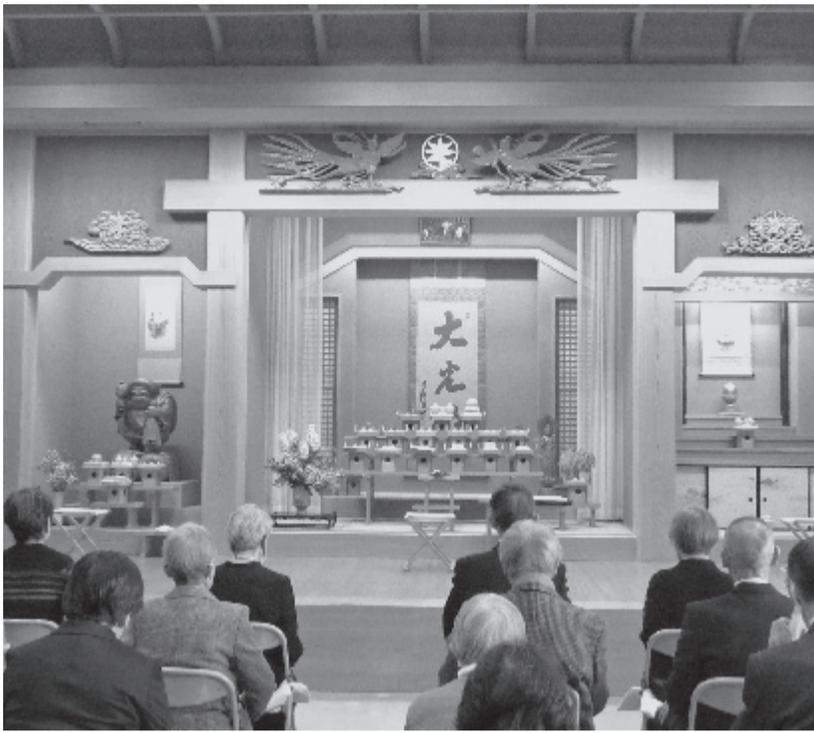


本部祭典にて挨拶を述べる会長

御聖誕百四十三年祭 大感謝

去る令和七年十二月二十一日、明主様御聖誕百四十三年祭・大感謝、あわせて十二月感謝祭が執り行われました。祭典は本部祭典の様子がライブ配信され、各布教拠点、またそれぞれの場所において心を合わせて明主様の御聖誕をお祝い申し上げるとともに、大光明・明主様に一年間の感謝「大感謝」が捧げられました。また、この日は甲子の日にあたり、みろく大黒天神様の御祭りが祭典の中で執り行われました。

さらに、令和七年十二月二十三日の明主様御聖誕参拝には、光守様のお出ましを賜り、地方より参集した布教拠点責任者、教師資格者、東京教会信徒(有志)と共に、会長先達のもとに参拝が執り行われました。



本部祭典における御神前の様子



御聖誕参拝にお出ましされた光守様をお困みでの写真撮影が行われました。



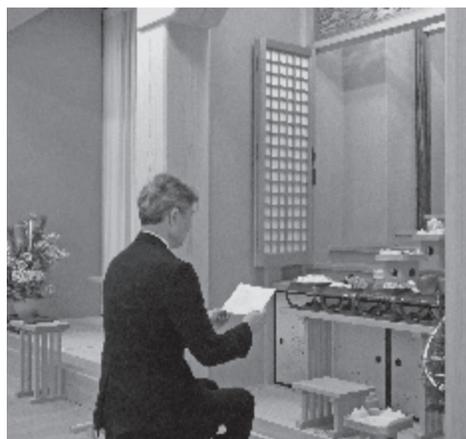
本部では明主様の貴重な御写真をはじめ御愛用の夜具(かいまぎ)、調度品の展示が行われました。

令和七年哀悼慰霊祭執り行われる

昨年の令和七年十二月三十一日、令和六年末から令和七年末までに帰幽された御霊様の「哀悼慰霊祭」が執り行われました。この日は、祖霊殿に御膳をお供えし、一柱、御招魂させて頂き、献花、善言讃詞、神歌を奏上し懇るなる御供養のみまつりを執り行わせて頂きました。

哀悼慰霊祭 御招魂者 名簿(敬称略)

- | | |
|------------------|-----------------|
| 令和六年十二月六日……近藤 恵子 | 〃 八月三十日……遠山 芳徳 |
| 令和七年一月十六日……高野 智 | 〃 九月八日……近江 道恵 |
| 〃 一月二十三日……佐久間隆義 | 〃 九月二十六日……本多 和子 |
| 〃 二月七日……西堀 宏 | 〃 十月十一日……松澤 巖 |
| 〃 二月二十二日……早津利恵子 | 〃 十月十一日……小林 富子 |
| 〃 三月一日……山口 道夫 | 〃 十月三十日……伊藤 幸枝 |
| 〃 四月十一日……菊池 佳子 | 〃 十一月十日……荒川つや子 |
| 〃 四月十七日……石橋 弘子 | |
| 〃 四月二十五日……田中 順子 | |
| 〃 五月二十二日……玉田 文子 | |
| 〃 六月二十九日……今野かつ子 | |
| 〃 七月九日……久保 清治 | |
| 〃 八月六日……岡本美千代 | |
| 〃 八月六日……小林フジイ | |
| 〃 八月十日……北川 勝利 | |
| 〃 八月十日……米田 正恵 | |
| 〃 八月二十二日……真瀬 進 | |



祖霊殿における御招魂の様子

春季大祭・春のみたままつり三月感謝祭のお知らせ

◎ 祭典日 令和八年三月二十日(金・春分の日) 十時

◎ 参拝所 東京本部、各布教拠点(本部よりライブ配信)

春の大御祭典とともに春彼岸の慰霊祭および三月感謝祭を執り行わせていただきます。

大光明・明主様への感謝と祈りをお捧げさせて頂くとともに、祖霊様に心のこもった御供養をさせて頂きましよう。